

## 実践報告

## 看護師がとらえた慢性疾患をもつ学童への看護ケアの意味

奈良県立医科大学医学部看護学科  
別所 史子, 山田 晃子, 上本野 唱子

Meaning of nursing care from nurses' point of view for school children with chronic diseases

Fumiko BESSHO, Akiko YAMADA and Shoko KAMIMOTONO  
Faculty of Nursing, School of Medicine, Nara Medical University

## 要旨

本研究は、慢性疾患をもつ学童への看護ケアの意味を看護師の体験から明らかにすることを目的とし、16名の看護師に半構成面接を行った。その結果、【子どもに寄り添う関係】、【慢性疾患をもつ子どもとかかわることへの喜びの実感】、【慢性疾患をもつ子どもの看護の本質に触れる】、【子どもの成長発達の一過程へのかかわり】、【慢性疾患をもちながら成長する子どもの将来的な見通し】の5カテゴリーが抽出された。看護師がとらえた慢性疾患をもつ学童への看護ケアの意味は、学童との関係構築のありようによって変化していた。

慢性疾患をもつ学童との関係構築の方法は、まず、最初の手がかりとして《子どもを知る》ために《子どもの身近な存在》としてかかわりながら子どもとの距離感を縮めていくこと、この最初の段階を越えることにより《子どもの抱えている問題が複雑》であることの影響を受けながらも《表面的なものではなく子どもの気持ちに近づく》ことを可能にしていた。そして、子どもや先輩看護師などの人的要因の影響を受けて看護ケアに対する振り返りを行ったことにより、すぐに成果を求めるのではなく【成長発達の一過程へのかかわり】における看護の意味を考え、《すぐには目に見えない看護ケアの成果》への気づきを促進したと考えられた。

キーワード：小児慢性特定疾患，学童期，看護ケア，関係構築

## I.はじめに

かつて小児慢性疾患の代表とされていた喘息や慢性腎疾患、糖尿病は治療法の進歩により、現在は外来治療が主になっている。一方、重症例・難治性の場合には、依然長期入院治療が必要である（日本小児アレルギー学会，2002；日本糖尿病学会，2001）。また、最近の傾向として、摂食障害、不登校などの心身医学的アプローチを要する小児の入院が増えており、慢性疾患に対する概念も変化してきた（五十嵐ら，1999）。そのため、看護においても以前にも増して多様な対応が求められている。

このような慢性疾患をもつ子どもの入院状況や疾病構造の変化を看護師のストレスとして捉えた研究（Ramjan,2004）や、子どもとの間に生じる距離感のタイプとその特徴について検討した研究

（鈴木，1998）はあるが、看護師が慢性疾患をもつ子どもに対してどのようなケアを行い、どのように子どもとの関係を構築しているのか、ケアの実態に関する研究は少ない。

そこで、本稿では看護師がとらえた慢性疾患をもつ子どもへの看護ケアからその意味を明らかにすることを目的とした。

なお、本研究では、健全な自己概念を発達させていく時期（舟島，2005）である学童期の患児への看護ケアに焦点を当てることとした。

本研究では、「小児慢性疾患」を小児慢性特定疾患治療研究事業の対象となる疾患および医療または生活規制のために継続して1ヶ月以上の入院を要する疾患とし、「体験」を看護実践を通じて看護師が子どもや看護に対して抱いた感情、考えと定義した。

## II. 方法

### 1. 対象者および調査期間

対象者は過去3ヶ月以内に小児慢性疾患児が入院する病棟で勤務経験があり、口頭と文書で同意の得られた看護師16名（男性1名、女性15名）であった。調査期間は2004年6月～7月であった。

### 2. 調査方法

先行研究（中野，1996）と多くの慢性疾患児が入院する病棟で臨床経験のある看護師2名（臨床経験年数5年程度）の意見をもとに面接内容を選定した。

次に同意を得た看護師1名にプレテストを実施した。面接内容と結果について母子保健領域の研究者らと協議し、面接内容を修正して本調査を実施した。主な面接内容は、日頃慢性疾患をもつ学童とのかかわりの中で感じていること、慢性疾患をもつ学童に対して行っている看護ケアと看護についての考えとし、対象者の同意を得てMDに録音した。面接終了後、再度データの使用について確認を行い、逐語録を作成した。

### 3. 倫理的配慮

本研究の趣旨、目的、方法、研究協力の任意性と拒否した場合も不利益を被らないこと、データの取り扱い方法について文書と口頭で説明し、研究協力を依頼した。文書で同意を得られた場合に、面接を実施した。

なお、本研究は広島大学大学院保健学研究科看護開発科学講座倫理委員会の承認を受けて行った。

### 4. 分析方法

まず一事例毎にデータの中から「慢性疾患をもつ学童への看護」に関する文脈を抽出し、質的帰納的に分析した。語られた内容の意味を損なわないようラベル化し、ラベルの意味内容の類似性からコード、サブカテゴリー、カテゴリーを抽出した。

次に統合分析を行った。個別分析を行った全対象者のデータを統合し、コード、サブカテゴリー、カテゴリーを抽出した。そして、カテゴリー間の関連性を図解化し、文章化した。

文章化については【】をカテゴリー、《》をサブカテゴリー、□をコード、「」を象徴的な言葉と

して示す。なお、コードは紙面の都合上、一部のみ記述する。

分析過程では母子保健領域の研究者3名から指導・助言を受け、研究者間の解釈が一致するまで分析を重ね、妥当性を確保した。

## III. 結果

### 1. 対象者の背景

対象者の年齢は24～55歳（32.6±9.9）、臨床経験は2～24年（8.5±5.7）、当該病棟での勤務経験は1～8年（3.8±2.2）であった。

### 2. 統合分析結果

データを意味内容の類似性に沿って分類し、統合した結果、【子どもに寄り添う関係】、【慢性疾患をもつ子どもとのかかわることへの喜びの実感】、【慢性疾患をもつ子どもの看護の本質に触れる】、【子どもの成長発達の一過程へのかかわり】、【慢性疾患をもちながら成長する子どもの将来的な見通し】という共通した5カテゴリーと15サブカテゴリー、43コードが抽出された（表1）。

#### 1) 【子どもに寄り添う関係】

ここでは、慢性疾患をもつ学童に対する看護師らの気持ちが述べられていた。

看護師らの《子どもの見方》は、当初「かわいそう」という感情を抱いていたが、子どもらしさに触れ、「病気だからって特別に見なくてもいいのかな」と感じるようになっていた。そして、近年増加している心の問題を抱えたケースに対して〔子どもにかかわる必要性を強く感じる〕一方で、〔立ち入ることができないレベルの問題に直面〕し、《子どもの抱えている問題が複雑》であることの影響を受けていた。しかし、看護師らは、意識的にスキンシップを図る、子どもと親との気持ちの橋渡しをするなどの方法で《表面的なものではなく子どもの気持ちに近づく》努力をしていた。また、《自分の病気体験》を活かして子どもの気持ちに近づくことができればよいと述べた看護師もいた。

#### 2) 【慢性疾患をもつ子どもとのかかわることへの喜びの実感】

ここでは、慢性疾患をもつ学童との関係構築の方略について述べられていた。

看護師らは、家族から離れて入院する学童に対して《子どもの身近な存在》としてかかわりながら関係構築を試みていた。そして、子どもとの距離が近づいてくると《子どもを知る》ことができ、「子どもの小さな変化や特徴がわかるようになってくる」と述べていた。看護師らは、子どもの成長や回復していく姿から喜びや自分のかかわってきたことの成果を実感しており、《子どもとの相互作用》を通じて子どもとかかわることへの喜びの気持ちを表現していた。一方で、自分の言動が子どもに与える影響力について「すごく責任がある」と述べ、《子どもとの相互作用》における自身の言動の重みを自覚する看護師もいた。

### 3) 【慢性疾患をもつ子どもの看護の本質に触れる】

ここでは、慢性疾患をもつ学童への看護に対する考え方が変化していく様子や、影響を受けた体験が述べられていた。

看護師らは、当初検査や処置の機会が少なく、日常生活援助においても見守りが中心であった慢性疾患をもつ学童への看護に対して戸惑い、その時々達成感がなく《すぐに目に見える成果がない》と感じていた。しかし、かかわっていくにつれて子どもが心を開いてくれるようになった、退院後近況を報告してくれたなどの体験から《すぐには目に見えない看護ケアの成果》を実感するようになっていた。看護師らは、急性期と慢性期の看護内容を比較しながら「すぐに結果が出なくてもそれでいいんだ」というように自分なりに慢性疾患をもつ学童への看護に対する意味づけを行っていた。また、慢性疾患をもつ学童への看護に対して戸惑いを感じていた看護師は、「時間はかかっても子ども思いの看護師になれたらいいよね」という先輩看護師の言葉を受けて、その時の気持ちを「先輩の（慢性疾患をもつ子どもの）看護に対する思いに触れた」、「慢性期の看護では処置などの看護技術よりも子どもとかかわることが大事なことだと気がついた」と述べていた。

### 4) 【子どもの成長発達の一過程へのかかわり】

ここでは、慢性疾患をもつ学童の成長発達の一過程にかかわることの重要性と成長発達を促すかかわりについて述べられていた。

看護師らは、社会性を発達させていく学童期に

長期入院を余儀なくされることについて、《入院していても子どもにとっては大事な時期》であり、入院生活の中で社会性を育むことができるよう意識的にかかわっていた。例えば、日常生活や遊びの中でルールを守る、子ども同士のかかわりの中で相手の気持ちを考える、日常生活の中で「達成感」を経験するなどであり、成長発達過程において学童が日常的に経験していくようなことであった。慢性疾患をもつ学童への日常生活援助において、看護師らは、子どもの成長発達段階を見極め、時間を要しても自分でできることは自分でできるよう《成長発達を促す》かかわりを行っていた。

### 5) 【慢性疾患をもちながら成長する子どもの将来的な見通し】

ここでは、慢性疾患をもちながら成長していく学童の将来を見据えた看護ケアの視点が述べられていた。

多くの小児慢性疾患では、薬物・食事・運動療法などのセルフケアを要するため、看護師らは〔行動レベルではなく知識レベルに働きかける〕ことによって《子どものセルフケアに対する自覚を育む》ことを意識してかかわっていた。そして、《これからもうまく病気とつきあっていけるように》するためには、〔退院後の日常生活に即した指導〕、〔ストレスへの配慮〕が重要と考え、退院後の日常生活にあわせたセルフケアの方法を子どもとともに考えながらかかわっていた。さらに、看護師らは、外来診察やサマーキャンプの機会に退院後の子どもの学校生活の様子を知り、今後病気をもって思春期、進学、結婚などを迎える子どもの《身近な相談役》としてかかわっていききたいという気持ちを述べ、将来的な見通しをもった継続支援の必要性を感じていた。

## IV. 考察

看護師がとらえた慢性疾患をもつ子どもへの看護ケアからその意味を分析した結果、その看護ケアの意味は、学童との関係構築のありようによって変化していた。

カテゴリー間の関係性（図 1）をもとに、慢性疾患をもつ学童との関係構築の方法、看護ケアに対する認識の変化のプロセスと関係する要素について考察する。さらに、健康問題を成長発達過程のなかでとらえた看護ケアの視点について考察す

る。

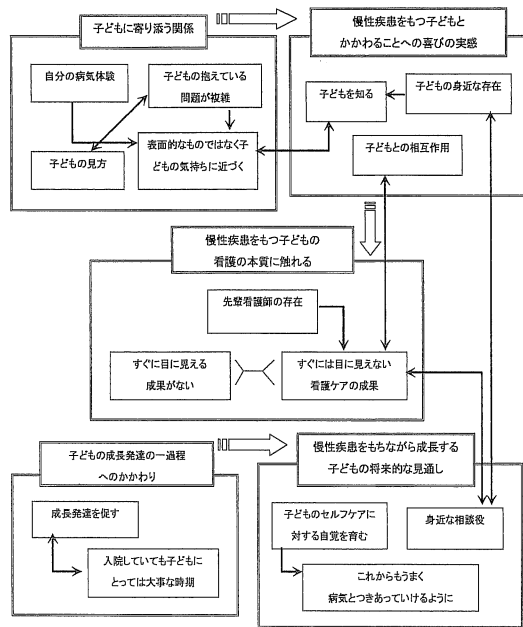


図1 カテゴリー間の関係性

### 1. 慢性疾患をもつ学童との関係構築の方法

看護師らは、親元から離れて入院している学童とのかかわりにおいて、《子どもを知る》ことが大切であり、《子どもを知る》ことによって子どもの特徴や小さな変化を感じ取るようになっていた。そして、看護師らは、小児慢性疾患の場合、心理面の問題が子どもの言動に現れていることが多いととらえ、《表面的なものではなく子どもの気持ちに近づく》ことが大切と考えていた。また、《自分の病気体験》を活かして子どもの気持ちに近づこうとする場合もあった。このように、看護師らは、《子どもを知る》ことへの関心をきっかけとし、《子どもの身近な存在》として【子どもに寄り添う関係】構築をしようとしていた。しかし、【子どもに寄り添う関係】構築を行っていくプロセスにおいて、《子どもの抱えている問題が複雑》であるために子どもの気持ちに近づける部分と近づけない部分があった。心身の問題を有する子どもとかわかる看護者に対する意識調査（土居ら、1991）では、子どもとのかかわりについて約4割の者が「できれば避けたい」と感じていたと報告されている。しかし、今回の調査では、看護師らは、子どもとスキンシップを図る、子どもと家族の気持ちの橋渡しをするなど【コミュニケーション技術を駆使】して、子どもの気持ちに近づこうとしていた。ここから、看護師らは、《子どもの抱えてい

る問題が複雑》であることの影響を受けながらも、子どもとの距離の取り方を模索しながら関係構築を行っている現状が明らかになった。一方で、《子どもの抱えている問題が複雑》であることは子どもとの距離を遠ざけるばかりではなく、《表面的なものではなく子どもの気持ちに近づく》という距離のとり方にも影響していることが明らかになった。このような関係構築の方法には、学童期という時期が《入院していても子どもにとっては大事な時期》であるという認識や、生涯セルフケアを要する慢性疾患の特性が影響していた。

以上のことから、慢性疾患をもつ学童との関係構築の方法は、まず、最初の手がかりとして《子どもを知る》ために《子どもの身近な存在》としてかわりながら子どもとの距離感を縮めていくこと、そして、この最初の段階を越えることにより《子どもの抱えている問題が複雑》であることの影響を受けながらも《表面的なものではなく子どもの気持ちに近づく》ことを可能にしていた。さらに、学童の【成長発達の一過程へのかかわり】に対する認識が、【慢性疾患をもちながら成長する子どもの将来的な見通し】をもった支援への認識を高めていくと考えられた。

### 2. 看護ケアに対する認識の変化のプロセスと関係する要素

学童期は、セルフケアにおいて日常生活面では特別な援助を必要としなくなり、生活習慣の完成期といえる（勝田、2008）。本調査でも慢性疾患をもつ学童への看護ケアは日常生活の見守りが中心であり、看護師らはこのような看護ケアに対して、当初達成感が得られず戸惑いを感じていた。しかし、看護師らは《子どもとの相互作用》を通じて子どもの成長発達・回復過程に携わったという【慢性疾患をもつ子どもとかわかることへの喜びの実感】を得ていた。また、先輩看護師の看護観に触れたこと、先輩看護師の経験を学んだエピソードが述べられており、《先輩看護師の存在》から影響を受けていたといえる。看護師らは、このような周囲の影響を受けながら、慢性疾患をもつ学童への看護ケアに対する意味づけを行い、自分なりに「これでいいんだ」と思えるようになったという気持ちの変化を述べていた。このようにこれまで行ってきた看護ケアを振り返ったことは、子どもの成長発達・回復過程にあわせて見守る行

為(勝田, 2008)も学童にとっては必要な看護ケアであり, すぐに成果を求めるのではなく【成長発達の一過程へのかかわり】における看護の意味を考え, 《すぐには目に見えない看護ケアの成果》への気づきを促進したと考えられた。

今回の面接では, 当該病棟での勤務経験年数 1~8年(臨床経験年数 2~24年)の幅広い対象者が得られたが, 経験年数による差や特徴は明らかではなかった。これは, それぞれの対象者の体験の内容が単に経験年数に比例するものではなく, それぞれの学童や学童への看護に対する気持ちが反映されたものと考えられる。星ら(1996)は, 小児看護の経験年数が子どもとかかわる態度に影響し, 3年以降に子どもと接する態度が受容的に変化する傾向があると報告している。しかし, 今回面接調査を実施したことにより, 一概に経験年数でとらえるのではなく, それぞれの対象者の体験を意味づけていくプロセスが重要であることが明らかになった。ここから, 面接などの自分の体験を言語化する機会は, 日々の看護ケアに対する意味づけを行うきっかけとなり【慢性疾患をもつ子どもの看護の本質に触れる】体験に効果的な影響をもたらすと推察された。

以上のことから, 慢性疾患をもつ学童への看護ケアに対する認識の変化のプロセスに関係する要素として, 子どもや先輩看護師といった人的要因の影響が大きいといえる。

### 3. 健康問題を成長発達過程のなかでとらえた看護ケアの視点

今回の面接において, 看護師らは【慢性疾患をもちながら成長する子どもの将来的な見通し】をもった支援の必要性を感じていることが明らかになった。看護師らは, 入院中に学童の【成長発達の一過程へのかかわり】の経験から, 健康問題を成長発達過程のなかでとらえた看護ケアの視点を育んでいた。

そこで, 将来慢性疾患をもちながら成人期に至る患者が増えることが予測され, 成人化を見据えた支援の必要性が提唱されていることから(奈良間, 2010; 仁尾, 2008), 成長発達過程のなかでとらえた看護ケアのあり方について考察する。

看護師らは, 慢性疾患をもつ子どもの成長発達過程において予測される問題に対して, 子どもの《身近な相談役》としてかかわっていききたいとい

う気持ちを有していた。このような考えは, 看護師らが入院生活の中で構築してきた《子どもの身近な存在》としての関係が基盤となっていた。慢性疾患をもちながら生活する学童について, 特に学校生活が始まってからの方が友達との違いを感じてストレスが高くなる(中村ら, 1996)との報告がある。一方で, 病気をもちながらいかに生きていくかを模索し, 自分なりの対処行動を見出していくケースもある。慢性疾患をもちながら成長していく子どもたちは, 周囲との関係性のなかで自らのアイデンティティーを確立していく過程を経験すると思われ, この過程にかかわる意義は大きいと考える。油谷ら(2010)は, どの発達段階にある小児であれ将来的には成人として自立していくことを認識し, 入院, 外来を問わず継続性のなかでケアを展開することの重要性を述べており, 今回病棟看護師らが認識していた【慢性疾患をもちながら成長する子どもの将来的な見通し】をもった看護ケアの視点を病棟-外来の連携システムに反映していくことが重要と考える。

## V. 結論

本研究では, 慢性疾患をもつ学童への看護ケアの意味を看護師の体験から明らかにすることを目的とし, 16名の看護師を対象として半構成面接を行い, データを質的帰納的に分析した。その結果, 看護師がとらえた慢性疾患をもつ学童への看護ケアの意味が明らかになり, その意味は, 学童との関係構築のあり方によって変化していた。

1. 看護師がとらえた慢性疾患をもつ学童への看護ケアは, 【子どもに寄り添う関係】, 【慢性疾患をもつ子どもとかかわることへの喜びの実感】, 【慢性疾患をもつ子どもの看護の本質に触れる】, 【子どもの成長発達の一過程へのかかわり】, 【慢性疾患をもちながら成長する子どもの将来的な見通し】という5カテゴリーと15サブカテゴリー, 43コードから構成されていた。
2. 慢性疾患をもつ学童との関係構築の方法は, まず, 最初の手がかりとして《子どもを知る》ために《子どもの身近な存在》としてかかわりながら子どもとの距離感を縮めていくこと, そして, この最初の段階を越えることにより《子どもの抱えている問題が複雑》であることの影響を受けながらも《表面的なものではなく子

- もの気持ちに近づく》ことを可能にしていた。
3. 看護ケアに対する認識の変化に関係する要素として、子どもや先輩看護師といった人的要因の影響が大きかった。
  4. 看護ケアに対する振り返りを行ったことにより、すぐに成果を求めるのではなく【成長発達の一過程へのかかわり】における看護の意味を考え、《すぐには目に見えない看護ケアの成果》への気づきを促進したと考えられた。

#### 研究の限界と今後の課題

本研究は、病棟看護師がとらえた慢性疾患をもつ学童への看護ケアの認識を明らかにしたものであり、外来看護師の立場からの検討は行われていない。今後外来看護師にも調査を行い、慢性疾患をもちながら成長していく子どもへの看護ケアシステムについて検討していくことが課題である。

#### 謝辞

本研究にご協力くださった看護師の皆様に深謝いたします。そして、本研究にご理解をいただき、調査の場を提供してくださった病院長様、看護部長様、看護師長様に深謝いたします。

また、研究のご指導をいただきました広島大学大学院保健学研究科故田中義人教授に深謝いたします。

#### 文献

- 油谷和子, 大塚香, 佐々木美和子他 (2010) : 成人移行期支援に関する院内システムづくり. 小児看護, 33 (9) : 1269-1274.
- 土居久子, 北島靖子, 西村あをい他 (1991) : 心身の問題行動をもつ子どもの看護について. 順天堂医療短期大学紀要, 2 : 55-63.

- 舟島なおみ (2005) : 看護のための人間発達学第 3 版, 医学書院, 東京.
- 星直子, 小林八代枝, 霜田敏子 (1996) : 入院児に接する看護婦の態度の検討. 日本小児看護研究学会誌, 5 : 67-70.
- 五十嵐勝朗, 黒沼忠由樹, 小出信雄他 (1999) : 小児慢性病棟の役割. 医療, 53 : 524-527.
- 勝田仁美 (2008) : 子どもの成長・発達と看護. 中野綾美編集. 小児の発達と看護. メディカ出版, 東京.
- 中村伸枝, 兼松百合子, 武田淳子他 (1996) : 慢性疾患患児のストレス. 小児保健研究, 55 : 55-60.
- 中野綾美 (1996) : 慢性状態の子どものケアに対する看護者の専門職としての姿勢. 高知女子大学紀要 (自然科学編), 45 : 115-125.
- 奈良間美保 (2010) : 子どもと家族を主体としたセルフケアの発達支援. 小児看護, 33(9) : 1252-1256.
- 日本小児アレルギー学会・編 (2002) : 小児気管支喘息治療・管理ガイドライン. 協和企画, 東京.
- 日本糖尿病学会・編 (2001) : 小児・思春期糖尿病管理の手びき. 南江堂, 東京.
- 仁尾かおり (2008) : 先天性心疾患をもちキャリアオーバーする人の成育看護. 駒松仁子編集. キャリーオーバーと成育医療. へるす出版, 東京.
- Ramjan, L. (2004) : Nurses and the 'therapeutic Relationship' : caring for adolescent with anorexia nervosa, Journal of Advanced Nursing, 45 (5) : 495-503.
- 鈴木千衣 (1998) : 小児がん患者・看護婦関係における看護婦の心理的な距離感の構成因子と意味. 看護研究, 31 (2) : 179-188.

表1 看護師がとらえた慢性疾患をもつ学童への看護ケア

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
子どもに寄り添う関係	子どもの見方	病気の子ども/普通の子ども/看護師以外の視点からみた子ども
	子どもの抱えている問題が複雑	コミュニケーション技術を駆使する/親子をつなぐパイプ役になる/子どもにかかわる必要性を強く感じる/立ち入ることができないレベルの問題に直面する/看護師へのサポート体制構築の必要性
	表面的なものではなく子どもの気持ちに近づく	慢性疾患をもつ子どもへの看護における心のケアの重要性/子どもの言動の意味を読み取る努力をする
	自分の病気体験	息苦しさの体験がわかる/私の強み
慢性疾患をもつ子どもと かかわることへの喜びの 実感	子どもの身近な存在	子どもの身近な存在となる関係の築き方/子どもとともに過ごす時間の重要性
	子どもを知る	子どもの変化に敏感になる/子どもの特徴がわかるようになる
	子どもとの相互作用	子どもが成長する喜びを実感する/子どもの生活に貢献できる/自分が子どもに与える影響を自覚する/子どもとの相互作用の実感/看護師としての存在意義を見出す
慢性疾患をもつ子どもの 看護の本質に触れる	すぐに目に見える成果がない	日々の看護における達成感のなさ/すぐに結果がみえない看護へのジレンマ/抱いていた看護師の仕事とのギャップ
	すぐには目に見えない看護ケアの成果	退院後も双方の記憶に残る関係性がある/人と人との関係性を構築することの重要性を確認する/急性期とは異なる慢性期ならではの看護があることに納得する
	先輩看護師の存在	先輩看護師の看護観に触れる/実践につながる先輩看護師の体験
子どもの成長発達の一 過程へのかかわり	入院していても子どもにとっては大事な時期	子どもにとって大事な時期であるという認識/入院治療中でも日常生活を重視する/入院による影響を最小限にする/入院生活の中にも社会がある/患児同士の関係性を重視する
	成長発達を促す	退院後の生活に適応できることを目標にする/子どもの自立への支援
慢性疾患をもちながら成長する 子どもの将来的な 見通し	子どものセルフケアに対する自覚を育む	行動レベルではなく知識レベルに働きかける/子ども自身のこととして意識させる
	これからもうまく病気とつきあっていけるように	退院後の日常生活に即した指導/ストレスへの配慮
	身近な相談役	学校生活における療養行動上の問題/子どもにとっての支援者の不足/成長発達段階の特性を踏まえた対応の仕方